

言語文化的視点から見た花の詩的表現についての考察 —花ことばのレトリックを中心に—

段 静宜(関西外国語大学大学院生)

1. はじめに

長い歴史の中で、花は人間に影響を与え続け、今日でも我々の日常生活を彩るかけがえのない存在である。人間の文化は、様々な面において花の文化によって特徴づけられている。言葉は文化を反映するものであり、花の文化とのふれあいは我々の言葉の世界に深く浸透している。「花言葉」とは「象徴的な意味を持たせるため植物に与えられる言葉」のことで、アジアにせよ、ヨーロッパにせよ、植物それぞれに特別な意味を与えるのは世界共通である。例えば、ヨーロッパ文化に見られる「深紅のバラは恋人に対する愛」、「カーネーションは母親に対する愛」などの表現は、世界中で認知度が非常に高い花言葉である。

主体が外界を知覚し、外界を理解していく認知プロセスには、外界に対する主体の主観的なパースペクティブ、主体の身体性にかかわる視点が反映されている。我々は花に対する視覚や触覚など基本的な身体経験に基づいて、「赤いバラ」、「白いユリ」、「桜が散る」など、花の成長過程や変化を描写する言語表現を、比喩的な意味で人間の世界の意味づけに取り入れてきている。

2. 問題提起

花ことばについて、中国において孫(2011)はメタファーの視点から、中英両言語における花ことばの対照研究を行い、花の色、容態に基づいて分析した。そして、劉(2005)は、文化的視点から、中国とヨーロッパにおける花の文化的意味について研究した。日本では、樋口(2004)が、花ことばの起源と歴史を詳しく説明した。現時点では、花ことばについての考察は主に歴史、文化的面から行われており、花ことばのメタファー表現、そして背後にある人間の認知プロセスについての研究はまだ不足である。本発表では、言語文化的な視点から、バラなどのヨーロッパの代表的な花ことばを具体的に考察する。さらに、中国、日本と西洋の花ことばの対照研究を通して、花に関する文化の比較を試みる。

3. 花ことばのレトリック

3.1 「恋は花」のメタファー

花は「恋」のメタファーとして使われることが常にみられる。段(2018)は、「花が咲く」ことを「恋をする」ことに喩えるのは「人間は植物」の概念メタファーに基づいて、人間の身体経験に大いに関係があると論じている。

(1) Our love is flowering.

(2) 恋の花咲く。

(3) 桃花运(桃の花の運：女運、恋愛の運のこと)

「恋は花」のメタファーは、花と四季の関係が合わさったものである。中国語には、例(3)のような表現があり、桃の花の運は特に恋愛の運を表し、桃の花は恋のメタファー表現として使われる。「仲春，令会男女，奔着不禁。」¹、「桃之有华，正婚姻之时也。」²の記述により、桃の花が咲いている春は、青年男女が恋愛、結婚する時期だと考えられる。段（2016）は、これは生物学の面で「春は交配の季節」という自然界における一般的な規律に関わり、人間の基本的な身体経験の一つと言えると分析している。中国語における桃の花は恋のメタファーを例として、このようなメタファーが成り立つのは、図1のような認知プロセスを介したと考えられる。

〈提喩による隠喩の再解釈〉

桃の花 → 春の花[類の提喩(一般化)] → 春[(一般化)] → [種の提喩(特殊化)]
 春の行事 → [種の提喩(特殊化)]恋愛

図1. シネクドキによるメタファーの再解釈(段 2016 を参考)

3.2 花ことばについて

次は「花」という上位レベルの概念に基づいて、下位レベルのバラやキキョウなど、「花ことば」を通して、花が持つ意味について具体的に考察を試みる。

表1. 愛に関する花ことば(一部)

花名	色	花言葉
バラ	赤	愛、あなたを愛します、熱烈な恋
キキョウ	紫	永遠の愛
ナデシコ	ピンク	純愛
ツバキ	ピンク、赤、白	完全な愛
チューリップ	赤	愛の告白
サクラソウ	ピンク、紅紫	初恋
アネモネ	赤	君を愛する

花ことばは、種とするバラ、キキョウ、サクラソウ、ナデシコなど下位類の花に与える特別な意味で

¹ 「仲春之月，令会男女，奔着不禁。」：春は男女交歓の季節である。（『周禮・地官・媒氏』）

² 「桃之有华，正婚姻之时也。」：桃の花が咲く時期は婚約を結ぶ時期である。（宋・朱熹『詩集伝』）

あるが、それは、前述したような類である「花」という上位に当たる概念と大いに関連する。

表1から分かるように、ヨーロッパでは、花ことばは人間の感情に大いに関係がある。一方、中国や日本では、花は人間の感情を表すうえに、人間の性格、さらに人間自身に喩えられる傾向がみられる。中国では、蓮の花を「君子」に喩え、日本では、桜は武士の象徴である。

(4) 蓮，花之君子者也。³

(5) 花は桜木、人は武士

斬、段(2017:371)はこのような花の比喩について、「古代中国の文人たちは自分の道徳観念、人生への追求を花に寄せ、“花十友”、“花十二客”、“花王花相”という別称を花に与え、花は人間と同じ性格を持つように擬人化されている。」と分析を行った。日中両国における花の擬人化は花ことばとは言えないが、このようなレトリックは更に抽象的、創造的であり、かつて中国の「儒家思想」、日本の「武家社会」の文化を反映することができる。

3.3 ケーススタディ

花ことばは、ギリシャ神話と宗教に大いに関わっている。バラを例として、ギリシャ神話では、美の女神アフロディテが海の泡から生まれた時にバラも一緒に生まれたものとされていた。バラに関するギリシャ神話や伝説が数多く、その中には、女神のアフロディテは恋人のアドニスを救うため足に怪我をし、流した血が白色のバラの花を赤く染めたというのが有名である。中世になってから、バラとキリスト教の関係が密接になってきて、受難や殉教の血の象徴となってきた。「この受難の意味はしだいに薄れてゆき、キリストとしてこの世に姿を現した愛の象徴となった。」(樋口 2004:78) ことにより、近代に至って、バラは美人、情熱への連想を起こす。バラの花ことばは、「神様の愛」から「人間の愛」に移っていき、恋人同士の愛は前景として拡張される。

(6) My love is a red rose.

例(6)には、「愛は赤いバラだ」というメタファー表現があり、赤いバラは恋の気持ちを伝える媒介で、世界中に広がっている。愛が赤色のバラであるのは、赤色が引き起こす「情熱」、「犠牲」などの身体感覚と大いに関連する。それに従って、赤いバラは恋人に対する「真実の愛」のメタファーになったようである。

花ことばは人間が感情を表す表現の一種である。花の色や形状、咲く時期さらに地域や文化に基づく身体経験が異なるため、花に与えられる意味は多様である。花の意味がこのように創造的に拡張されるのは、メタファー、メトニミー、連想のプロセス等と密接に関連しているからである。花を含む自然界を通して世界を解釈し、意味づけしていく人間の修辭的な認識により、日常言語の豊かな意味が可能になっている。

³ 「蓮，花之君子者也。」：蓮ハ花ノ君子タル者也。(宋・周敦頤「愛蓮ノ説」)

4. まとめ

花ことばは単なる一種の言語表現ではなく、その背後に人間の認知機能が働いている。その認知プロセスは、厳密には歴史や文化、各時代の宗教や政治と深く結びついている。花に関しては、日本とアジア諸国、そして西洋諸国との交流に長い歴史があり、海外の花は日本に伝わった後、日本独自の文化的意義が付与され、日本文化に定着することとなった。花に関する言語表現は、その国の民族や社会、風習、歴史などと深い関係を持っている。花ことばは、社会文化的な背景や民族文化の心理などの特徴を反映している。文化背景や自然環境の相違によって、各地域や国の花の文化に多様性が認められる。このような差異を理解することは、各地域や国の社会文化と民族心理をより深く理解することに通じる。以上の考察に基づいて、異文化コミュニケーション及び外国語教育に関する新たな考察を試みる。

参考文献

- 段 静宜 (2016). 認知言語学に基づく花の慣用表現に関する日中対照研究—蓮、桃、梅を中心に— 修士論文 関西外国語大学大学院
- 段 静宜 (2018). 身体性に基づく「人間は植物」の概念メタファーに関する認知言語学的研究—植物に関わる慣用表現を中心に— 学会口頭発表論文 日本語用論学会メタファー研究会シンポジウム「身体性」
- 樋口康夫 (2004). 花ことば—起源と歴史を探る— 八坂書房
- 靳 衛衛・段 静宜 (2017). 日中両言語における蓮、桃に関する慣用表現の対照研究 杉村博文教授退休記念中国語学論文集 白帝社 pp. 367-390.
- Lakoff, G., & Johnson, M. (1980). *Metaphors We Live By*. Chicago, IL: University of. (G. レイコフ & M. ジョンソン(1986). レトリックと人生 渡部昇一ほか(訳) 大修館書店)
- 刘 俊 (2005). 汉英花卉植物词的文化诠释 绥化学院学报, 25(3), 104-106.
- 二宮孝嗣 (2015). 美しい花言葉・花図鑑 彩りと物語を楽しむ 株式会社ナツメ社
- 孙 华燕 (2011). 隐喻视角下中西方花语的对比 黑龙江教育学院学报, 30(5), 150-152.
- 王 运璇 (2013). 隐喻视角下的中日花语意义对比分析 山西青年(理论研究), 8, 126-127.
- 山梨正明 (1988). 比喩と理解 東京大学出版会
- 山梨正明 (2000). 認知言語学原理 くろしお出版